

熊本藩における華岡流医師の動向

竹 下 喜 久 男

はじめに

華岡青洲の全身麻醉薬・通仙散の開発とそれによる外科手術の成功はヨーロッパの知識と元代以来の中国の手法の接点の上にもたらされたものとして今日評価されているが、^①紀州の田舎にあつた青洲の許へ全国から二千人に近い学徒が集まり、青洲の口授と執刀に耳を傾け目を凝らし、門弟が医術を習得して帰郷し各地で難治とされた病いと格闘した。

青洲とその周辺についての研究は呉秀三『華岡青洲先生及其外科』をはじめ少なくない。殊に華岡流外科の伝播については今日各地に残されている門弟の手になる写本により、^②あるいは門弟の手術記録を通じて近年一部が具体的に明らかにされつつある。

本稿では肥後熊本藩に例をとり華岡流外科伝播の一端を明らかにしたい。

呉秀三『華岡青洲先生及其外科』に收める門人録には肥後から一三名の入門者をあげているが、入門の事情や帰郷後の動静について知れるところはない。本稿に紹介する一〇名は青洲の春林軒、鹿城（良平）の大坂合水堂に入門したもの、青洲の高弟に師事したもの、師統については不明確ながら華岡流を称するものなどであるが、青洲・鹿城に直接師事したとする四名のうち一名を除いて右の門人録にはみえない人たちである。かれらの動静を『町

在」(寛政十一年(慶応三年)を通して窺いたい。『町在』(熊本大学付属図書館寄託「永青文庫」所蔵)は熊本藩惣庄屋が管轄する手永を単位として領民のうち藩へ選挙し進級・褒賞に値する者の事歴を郡代が書き上げ、郡方奉行衆中に伺い出、選挙方奉行中の僉議を経て裁可した記録を綴ったものである。七〇年間に延べ数万人に上る書き上げで、そのうち医師は延べ二、〇〇〇人余を数える。伺い出に際して医師の能力を熊本藩医学校再春館の医業吟味役が審査するため治験・医案を付している場合がある。

『町在』に依拠しながら一〇名の医師の略歴を紹介し、その上で華岡流に接近した経緯に検討を加え、さらに華岡流医師としての能力の程を示す治験をあげ、華岡流医術の肥後への伝流の成果を明らかにしたい。

一 華岡流外科医略伝

ここでとりあげる華岡流外科医のうち、青洲・鹿城兄弟に師事したとするもの四名、青洲の高弟鎌田玄台(正澄)を通して華岡流を学んだとするもの四名、師弟関係は明確でないが華岡流を称するもの二名について『町在』に依り略伝を紹介したい。

A 春林軒・合水堂の入門者

1 南友岳 寛政五年(一七九三)生、⁽⁵⁾種山手永西吉本村(現八代郡竜北町) 御郡代直触医師

本稿で扱う華岡流医師で門人録に名前のみえる唯一の人であるが略歴で知れるところは少ない。友岳が「外療之儀ハ紀州花岡随軒門弟ニ而文化七年(三ヶ年彼方相詰稽古)したとあり、友岳二〇歳前後という若さで青洲に師事したことになる。この時期は青洲の画期的外科手術成功の報が広がり、その盛名を慕って各地から来遊稽古する門人が増加しつつあるときで、また後述する青洲の高弟鎌田玄台(正澄)も文化九年に入門しているので、友岳はほ

は同年輩の玄台と十分知り合う機会があったと推測される。嘉永三年（一八五〇）友岳を御郡医師並に推挙した八代郡代から御郡方御奉行衆中宛の「御内意之覚」によれば、当時（五八歳）友岳の診療地域は種山手永の内九か村、野津手永の内一か村、河江手永の内一四か村、合計三四か村におよび前年嘉永二年に病家四〇〇軒余、患者数約一、〇〇〇人の治療にあたっていた。

2 大森春生 寛政七年（一七九五）生、山鹿手永湯町（現山鹿市） 御郡代支配浪人

先祖惣右衛門は丹後から豊前に移り浪人として曾根村に住んでいたが、寛永九年（一六三二）十二月細川氏肥後移封に際して随従を願い出、その後山鹿湯町に居住を許された。その子惣右衛門以降医業により生計をたてた。

春生は文化五年（一八〇八）田中慎斎に入門して三か年滞塾、続いて南漸の門で四か年医学・経学の稽古につとめ、さらに熊本藩医学校再春館にも出席、試業もうけた。その後文政九年（一八二六）「大坂花岡良平大医之由承及、彼地江罷越門人ニ相成、金創・眼科・整骨総而皆伝仕、同十一年帰国」した。春生が大坂の華岡鹿城（良平）の塾合水堂に入門した文政九年の冬鹿城は病に罹り紀州平山に帰り、翌十年四月二十八日没している。春生は鹿城にこのような状況下で直接に指導をうけることは期待できず、恐らく鹿城でなく紀州の青洲に師事し、皆伝をうけたものと考えられる。春生帰国約十年後の天保十一年（一八四〇）の診療は山鹿・中村・中富・南関・正院・竹迫・菊池各手永、さらには小国地域にかけ五九か村、家数六四〇軒、患者一、九〇〇人であったが、さらに一〇年後の嘉永三年（一八五〇）には六〇か村、竈数八〇〇軒余、患者三、六五〇人と増加している。それに加えて諸大名や自他御家中の通行をはじめ、臨時の病人、人馬所、抱夫などについて弘化三年から嘉永三年の五か年間に三七〇人の療治などにも当たった。診療内容は明らかでないが患者数の増加の状況をみても地域で評判を得ていたことが判る。診療の傍らに御家人（郷士のうち御惣庄屋直触以上）子弟の読書を中心とする指導も五〇人余に及んだ。

3 飯田春達 文政三年（一八二〇）生、関手永市村（現大分県北海部郡） 御郡代直触医師飯田養達孫養子

春達は天保五年（一八三四）十二月野津原手永下詰村の御郡代直触医師佐藤見民に師事し、同八年八月まで四年滞塾、同年十月熊本に出て山室宗全に師事し、同九年正月から同十年八月まで再春館にも懸名し修行した。その後延岡藩領の医師秋岡友哲に同十年十月から翌年八月まで師事した。天保十一年「九月大坂外科医師花岡準平江入門仕同十二年九月迄相滞外科稽古仕退帰」した。準平（南洋）は紀州那賀郡上野村安楽川の郷士奥松之助義致の弟で二四歳で青洲の門に入り、養子となり長女かめの婿として迎えられた。その後諸国に遊学し、青洲が没すると遺子鷺洲を補佐し、さらに天保八年には大坂に出て鹿城の後を承け、その子幸平を助けた。飯田春達が大坂に出た時期は合水堂で準平が腕を揮っていたころと考えられる。

春達帰郷後養祖父養達も病い勝ちとなり春達が代って診療することが多く、天保十三年一か年の診療地域は関手永の市村をはじめ久原・蔵懸・東西木佐上・東西上野・木田・細・馬場・神崎・大平・大小志生木・臼木・一尺屋・竹下・城原・浜・政所・横田・角子原の各村、高田手永の志村・小中嶋村、臼杵領内などおよそ六八〇軒、患者数八四〇人余を数えた。「就中花岡流外科之儀習練仕、難治之症追々快復仕候由二而一稜所柄弁理二相成」と特記している点からも、また後述する病案からも華岡流外科手術の成果に見るべきものがあつた。

4 武藤昌英 文政五年（一八二二）生 中村手永新町（現鹿本郡鹿本町） 御目見医師武藤大晋伴

昌英の祖父元桂は菊池郡河原手永から中村手永新町に入医を許され家業に出精し、郡代直触医師から御郡医師並に進席、その子大晋は文政三年七月親跡郡代直触医師、同十一年十一月御目見医師に進み「北目在二而ハ先ハ並も無之大医ニ而難病等御座候節熊本^ら医師を撰据受候節見立等相替候儀も無之候ニ付而ハ大病ニ而も大晋ニ見せ候得ハ安心仕候由」と周辺の人々から大晋の医術は信頼を得ていた。従つて「病人数八年ニ寄増減有之候得共三千、四千ニも及申候年も間々」ある状況であつた。

昌英は早くから儒医学を心懸け、天保七年正月再春館に懸席を許された。儒学は時習館教授の辛嶋才藏（塩井）、

池辺謙助に学び、天保九年四月から時習館に出席、医学については町野玄肅に天保十一年入門、多年滯塾して調業は勿論代診もし、同十四年三月には再春館居寮を命じられた。留学も二度仰付けられたが母の看病を理由に退寮を願出、その後四か年間各地に留学した。「外科八大坂花岡準平、筑前津田仙山、産科八京都水原三折、整骨術八長州石田精一右之通諸名家ニ罷越、何レも相伝」をうけた。また再春館の会説・講説・経絡・本草会・郊外物産会について成績優秀で家老から褒詞四度、銀子三両、金子二〇〇疋を二度拝領、再春館の司牌、司簿、司蔵を手全に勤め、銀三両宛三度拝領など、さらには施業、普請場での療治も褒賞された。昌英の安政末年の診療地域は中村手永（新町・上下御宇田・蒲生・靈仙・今田・上下吉田・名塚・中・久原白石・方保田・日置ノ上下高橋・庄・石淵・津袋・上下内田・太田・上下長野・五郎丸・長谷・長谷川・相良・矢谷・留久・椎持・山内の各村）、山鹿手永（湯町・竹林寺・志々岐・小原・津留・寺嶋・小群・西牧・麻生野・平山・長阪・岩野の各村）、中富手永（中富・上下分田・梶屋・川崎・千田・広町・小柳・土用月・庄嶋・藤井・久野・小嶋の各村）、深川手永（流川・荒牧・五海・寺町・高嶋・村田・水次・瀬戸口・池田・龍徳・大林・木山・道場・永山・水嶋・加恵・阿佐古・高田・宮原・西寺・西郷・木野本分・黒蛭・酒造野・辺田・菰入の各村）、河原手永（隈府・迫間・土豊水・生味・出田の各村）、正院手永（植木・宮原・山城・一坊・正院・平島・荻迫・今藤・田原の各村）、五町手永（古閑・北迫の各村）、竹迫手永（林原・三万田・橋田・田嶋の各村）、南関手永（松尾・久次手・赤坂・板楠の各村）、熊本など合計二一〇か村におよび病家七五〇軒余、患者数二、〇〇〇人余に上るとしている。

B 青洲高弟の門人

5 田代仁斎 天明三年（一七八三）生 甲佐手永和田内村（現上益城郡甲佐町） 櫛木寿悦育

仁斎は櫛木寿悦と縁類に当たるところから数年間櫛木宅に詰めて医業稽古に励み、享和元年（一八〇一）から熊本

の再春館に入学した。予て「紀州表ニ而花岡瑞軒外療を慕ひ居申候由之处、彼方之直弟子江医术を習得」として、直弟子がだれか明らかなくないが花岡流を習得したようである。さらに福岡恵迪の門人となり、外科とともに本道にも腕を揮った。恵迪はその門人徳永白受の書き上げによると「蘭法皆伝相済并骨術・金創等奥儀皆伝、其外風犬傷・直蛇喰鼠毒并癰瘡之痼疾類各別之伝法」をもつ漢蘭折衷の医師であつた。文政十年（一八二七）一年間に診療した患者は一、九〇〇人に上るが、その内には「異口、六ツ指鉢之片輪及乳岩等之難治当年迄凡八九十人無難ニ外治」と難病に対して花岡流の手術が功を奏したことを示し、難症の患者が遠方からも訪ねている。

6 渡辺宗悦^(中トモ) 文化二年（一八〇五）生 鶴崎町（現大分市鶴崎） 御郡医師並渡辺冲亭^(中トモ)養子

養父冲亭（明和八年 一七七一生）は早くから読書の志厚く、一八歳のとき杵築の三浦安貞（梅園）に六年間にわたり師事して内科術を修行、その間安芸の恵美三伯にも学んで寛政四年（一七九二）変業を許されて医師となつた。その後も二四歳で熊本の大城多十郎に入門、また熊本藩医福岡英安の許で三年間外科を学び、その間長崎の吉雄耕作に師事した。平素「家業心懸宜、療治方手広出精」により文化四年（一八〇七）苗字刀御免、御郡代直触となつた。文化十一年五月蘭科内外稽古のため大坂表の橋本宗吉に入門、同十一月まで滞在して蘭法の習得に意欲を燃やした。日常的医療活動については「鶴崎御家中并町在ニかけ江戸上下之面々ニ至迄」と熊本藩と江戸・大坂往来の外港にあたる鶴崎に出入する人々、さらに普請場・牢屋の傷病者の治療にもあたり、文政七年（一八二四）ころには年二、〇〇〇人前後の患者を診療するほどで、文政八年には御郡医師並に召出された。冲亭は天保十一年（一八四〇）近く直前に宗悦を養子に迎えた。

宗悦は豊後岡藩奥嶽組御目見医師堀柳悦の子で文化十三年二三歳のとき岡藩医伊東玄育を訪ね玄育が天保五年没するまでの一九年間師事し内外科の稽古に励んだという。その間には白杵藩海野有謙の許に一年間滞在、修行している。玄育の死後「伊予鎌田玄台（正澄）と申者方江罷越、花岡流外科稽古仕諸伝授等相済」天保八年六月辞し、

同月冲亭へ入門したが冲亭自身が病み、代つて宗悦が診療することも多くなった。また鶴崎表には「未熟之医生勝」ちで、宗悦は天保十四年から周辺の医者を誘つて鶴崎御茶屋の稽古所で附方会を始め、病案については熊本藩の独礼医師早水友玄に毎月一度指導をうけ研鑽に励んだ。当時友玄も老年となり、やがて代つて宗悦が中心となり高田郷から佐賀関にかけての遠方からも出席者があり熱心に勉強会をすすめた。嘉永三年（一八五〇）十二月には御郡医師並への進席が御郡方奉行中から許されている。それ以前天保十年に御郡代直触に推挙される際、宗悦のそれまでの治療のうち成功例五例を「治験」として付している。後に触れるが、まさに花岡流の医術が継承されていることが知れる。

7 原田文台 文政四年（一八二一）生 野尻手永矢津田村（現阿蘇郡高森町） 御郡代直触医師原田禎禧養子

先祖原田角兵衛は細川氏豊前小倉時代に御馬組頭を勤め、細川氏の移封に伴なつて熊本坪井に移り住んだが、その後浪人、熊本西光寺支配となり菅尾手永馬見原町に移居し数代を経た。幸硯が御郡代直触に召出されて以後幸意・玄碩・玄貞とその養子禎禧までの五代は御郡代直触医師を相続したが、禎禧が嘉永六年十月病没し、養子文台が家督を継ぐことになった。文台は天保五年三月寺倉秋提に入門して二年間蘭方を学び、同七年四月当時再春館師役であつた町野玄肅に師事して本道・外科を六か年修行、同時に再春館の会説・講釈にも出席、さらに同十三年七月豊後日出藩儒帆足万里に入門、一か年滯塾した。天保十四年（一八四三）八月伊予国大津之官医鎌田元台（^{タマ}）（正澄）江入門、華岡流外科一ヶ年余相詰執行し弘化二年正月には京都四条通に住む古医方の大家宇津木多一郎に入門、同年十一月大坂吉益家に半年間稽古を重ね、同三年七月帰郷した。このように文台は天保五年から弘化三年にいたる一三年間、本道・外科、漢・蘭二方の師六名に教えをうけたことになる。文台の診療の治験については現在知れないが、三三歳（嘉永六年）のときの診療地域は野尻手永の堂新町・津留・野尻・尾下・河原・矢津留・中・草ヶ部・永野原の各村、坂梨手永の宮地村、高森手永の新町・両色見村、菅尾手永の柳・小倉・日向・溜・高畑の

各村、計一七か村、その外岡藩領においても小川・九重野・次倉三か村、延岡藩領高千穂郡の五ヶ所・河内・田原・上野・三田井・岩戸・七折・曾木・獅子川九か村、合計二九か村、病家七〇〇余軒、患者一、一〇〇人余としてゐる。右の地域は「山野近備打散、就中延岡内ニ至り候而ハ行程十四、五里ニ懸、雨雪夜白之無厭尻軽ニ立廻り出精」と地理的悪条件にもかかわらず精力的に診療していた。

8 池田道斎 文政十年（一八二七）生 御目見医師池田道積伴

弘化元年（一八四四）再春館に入學し、本道は町野玄肅に師事し、「外科ハ予州大洲鎌田玄台方江遊學稽古」、經學・詩文は析原五郎助の門弟となり時習館に出席、講堂で褒詞に与るほどであった。

C 師弟關係不明で華岡流を称するもの

9 平山元貞 安永四年（一七七五）生 正院手永慈恩寺村（現鹿本郡植木町） 御目見医師

本道・經學をのち再春館師役にまでなつた田中司に師事し、詩文もよくした。眼科は筑後柳川勝万寺で學び、その後諸家の良方奇術を積極的に摂取し、平山家独自の家方を確立して診療にあたり、その効果をあげた。外科についてはこれまで家伝があつたが、さらに内藤家（不詳）の經驗方を稽古して加え、また「近年紀州花岡家之伝方、蠻方をも合シ」、本道・外科に活躍した。本来の眼科は天保元年には地元の本山郡をはじめ山鹿・菊池・合志・阿蘇・南郷・玉名・飽田の七郡から熊本城下にかけて一、四〇五〇〇戸、三、〇〇〇人の患者を診療し、委細に記録し兼ねる程であつた。そのうち四〇〇軒余には施薬している。また遠来の患者の便宜を計つて屋敷地内にいゝゆる病人宿を設けて逗留させ治療を続けた。元貞は天保六年六一歳で病死し、その子文叔は翌七年父の跡御郡医師並に召し出され家業を継いだ。

文叔は田中司馬に醫學・經學を學び、その後「於所柄稀成聞有之眼療、外療共紀州花岡流之秘術伝受仕、内外療

治方心懸厚、次第二功熟二相成」と父同様花岡流の秘術で難治の疾病を治癒させ次第に評判を高めた。弘化初年には正院手永をはじめ山鹿・中村・大津・竹迫・深川・河原・五町・中富・小田・内田・池田・荒尾・布田の一四手永に診療地域は広がり、さらに豊後日田表にかけ年間四、〇〇〇人余の診療にあたった。診療患者数からみると父元貞の晩年の天保二年から約一五年を経て元叔は三〇%強の増加した患者を診療していたことになり、その評判を裏付けているといえよう。

10 牧篤太 文政元（一八一八）生 竹迫手永林原村（現菊池郡七城町）竹迫手永南田嶋村御目見医師秋吉白受育日向浪人小林彦兵衛を祖とし、その四代孫の篤太は幼時秋吉白受の育となり、天保四年外様御医師組の田中慎齋に師事して経学・医学を学び、また天保十一年再春館師役であった町野玄肅、弘化四年肥前島原市村泰朴にそれぞれ入門「医学ニ身を委ネ花岡流之外科、西洋之医術も習熟」して嘉永四年林原村に帰った。帰郷しばらくした安政二年（一八五五）には三一か村、電数五〇〇余軒、病人数一、五〇〇人余の診療にあたった。

二 華岡流接近への道程

『町在』の「御内意之覚」を中心として知られる一〇人の略伝を前節に紹介したが、かれらに共通して華岡流外科術に接近させる要因を探すことは容易ではない。しかし僅かではあるが接近を促した要因と考えられるものが、かれらの師匠を通して窺えるのではなからうかと考え以下考察を加えたい。

渡辺宗悦と養父冲亭が師事した人の多さに先ず目を惹かれる。養父冲亭は寛政四年（一七九二）変業を許され医業を営んでいるが、それ以前天明八年（一七八八）豊後国東に住み開塾していた三浦梅園に師事している。それに関連してやや内容の異なる記事がある。すなわち「御内意之覚」の文化八年と文政八年のものである。文化八年の内容は冲亭一八歳のとき杵築三浦梅園の許へ六年間入学し、傍ら医術をも学び、二四歳で大城多十郎へ入学その節御

医師福岡英安の弟子となり三か年稽古に励み、一端引取つて後五か年間長崎・広島辺へ遊学したとある。他方文政八年では天明八年三浦梅園へ内科医術の稽古に出て、その間広島島の恵美三伯の許で稽古、寛政三年四月引取り、同月熊本の福岡英安に師事し、その間長崎吉雄耕^{マツ}作につき稽古したとある。前者は冲亭が町医から御郡代直触医師への進級推挙、後者が御郡代直触医師から御郡医師並への進級申請の際の書き上げで、全体としては後者が詳しい。

冲亭の梅園入門は天明八年に間違いないとすれば、梅園は寛政元年三月六七歳で没しているので冲亭の師事した期間は一年に満たないものであつた。梅園はいうまでもなく独創的な方法で天地万物に通じる条理を見出そうとし、多岐にわたる学問分野に関心を寄せ、一七か国から二〇〇余人の門人が集まつたという^⑤。大坂の天文学者麻田剛立、長崎の吉雄幸作などとの交流も梅園の学問の幅を示すものといえよう。広島島の恵美三伯^⑥は催吐治療法の先駆者としてその名の知られた恵美三白（寧固）の門弟長尾貞璋が養子として迎えられた人で、大笑と号した。大笑も養父に劣らぬ腕前で、弟子は五十余州六百人余に及んだという^⑦。福岡英安は医家として四代目である。吉益東洞の門に学び、寛政十一年（一七九九）二月には再春館金創療治師役となり本道も兼ねた。長崎の吉雄耕作とするのは幸作（耕牛 寛政十一年没）と考えられるが幸作は大通詞兼蘭方外科医で通詞をする傍ら出島の商館付医師から医学・医術を学び医書・字典類など原書の蒐集につとめ、家塾成秀館には多くの門弟が学び、吉雄流紅毛外科として広まつた^⑧。冲亭は幸作晩年の弟子となつたことになる。また冲亭は文化十一年（一八一四）五月四四歳のとき大坂橋本宗吉の許へ半年間学んでいる。橋本宗吉は江戸の大槻玄沢の芝蘭堂に入門、拔群の記憶力でオランダ語をマスターし、多くの著訳書を残し大坂における蘭学興隆の基を築いた人で、寛政十一年ころ医院兼蘭学・医学塾絲漢堂を設け外科を中心とした診療と教育にあたつた^⑨。

冲亭の修行の足跡をたどると古方医から蘭方医へと関心が広がり、療治に相応の成果と信頼を得「鶴崎御家中井町在二かけ江戸上下之面々二至迄當時二而八年々々千人内外療治」するにいたっている。

天保八年六月後に養子となる宗悦が冲亭に入門するまでに豊後岡・白杵の医師に師事しているが、どのような人であつたか知れないが花岡流外科術への開眼の契機となつた可能性はあろう。

宗悦が華岡青洲の高弟で当時伊予大洲にあつた鎌田玄台（正澄）へ入門したのは天保五年宗悦の師伊東玄育が没して以後冲亭に入門する天保八年六月までの数年間と考えられる。正澄の父明澄は江戸の杉田玄白、讃岐尾池左膳に学び、大洲帰郷後はこの地のはじめての蘭方医として活躍し、のち大洲藩医となつた。正澄は父の薫陶をうけ文化九年三月紀州華岡青洲の許へ入門した。正澄は本間玄調と並ぶ青洲の高弟で「独近世華岡氏之技、雖西洋名家殆不能出其右、而君究其蘊奥蓋精之¹⁰」とされ師を凌ぐ腕前を発揮した。正澄が施術したうちの五九例について症状、手術法、術後の手当を詳細に述べ、施術前後の症状を多色で図示した『外科起癰』一〇巻を発刊している。この書は正澄の臨床講義録ともいふべきもので門人松岡肇（吉田藩）が筆録し、養子新澄と羽原正翰（岡藩）・中島国光（川越）・垣生正徳（吉田）・家人矩武（宇土）・飯田直温（萩）らが二巻宛分担して校閲、出版したものである。正澄の門には伊予出身者三八名を始め、江戸・安芸・四国の土佐・新居から各一名、さらに九州各地から六名の計四八名の入門者がいたことが知れるが、本稿にとりあげた渡辺宗悦・原田文台・池田道斎の名はみえない。宗悦の華岡流外科術稽古の成果の一端は後述する治験に窺うことができる。

原田文台が初めに師事した寺倉秋提は「蘭方家」を称している。その秋提ははじめ渡辺柳寿に師事した。柳寿は文政九年春奥州の原恭篤が肥後を通過した際「柳寿一日入門」したと秋提が記している。原恭篤は文政六年ドイツ人シーボルトがオランダ商館医として長崎に着任した翌年長崎郊外鳴滝に塾を設けた際に高野長英らと同時期に入門した人物である¹²。柳寿が原恭篤に会つたのは鳴滝からの帰郷の途次である可能性がある。柳寿が蘭方医に多少でも関心を寄せたことは、その教えをうけた秋提のその後に影響を与えずにはおかなかつたであろう。実際秋提は文政十年春から「数年之間肥前長崎并前文日出表立罷越恭篤列之者共江隨身いたし居蘭法修行」したとあり、恭篤と

同じシーボルト門下の日野鼎哉に教えを乞い鼎哉の師の帆足万里へ入門して蘭方を学んだ。数年間の遊学生生活を終え天保五年熊本に帰郷した直後に原田文台は寺倉秋提の許に入門している。なお秋提の門下には野中宗育など長崎のポンペに学ぶものを輩出している。秋提の許で二年間学んだ文台は天保七年四月町野玄肅に入門した。町野玄肅は限府町人の出身であるが町野玄潜の門に学び再春館に出席していたが、町野玄潜の実子玄齡が早世したので弟子玄肅を養子として町野家八代目とした。玄肅は合力米一〇石五人扶持、外様医師組に召出され、間もなく「林家ハ勿論其余之儒家江も広く研究いたし候様」命をうけ江戸に遊学した。『升堂記』によれば玄肅は文政十一年六月廿日沢村武左衛門の紹介で林家に入門している。¹³玄肅は同十三年十月帰郷、天保六年五月再春館師役となり、桑満伯順（医業吟味本役）の次座とされた。その直後天保七年四月原田文台は玄肅に入門し本道・外科を六年間学んでいる。華岡準平の合水堂に入門した武藤昌英、鎌田正澄に入門した池田道斎も共に町野玄肅に入門し教育をうけている。その点で町野玄肅の存在は注目すべきものといえよう。

文台はさらに天保十三年七月日出の帆足万里に師事した。帆足万里は同じ日出の脇蘭室や大坂懷徳堂の中井竹山に師事し、日出藩の藩学教授さらに家老職を務めた。万里は多岐にわたる分野に関心をもち、蘭方だけに依ることについては批判的で、漢蘭の兼学をすすめた。門人も多く、文台が入門したときは万里六五歳で一切の藩務を退いて、速見郡南端村に塾を新しく設け西庵塾として一層教育に専念しようとした折であった。万里との関わりで文台は伊予大洲の鎌田正澄を知るところとなったのであろうか。万里と正澄との関係を示すものは、万里から正澄に贈られた七言絶句「贈鎌田医伯」¹⁴と先述した正澄晩年に出版された『外科起癢』一〇巻に寄せられた序文である。序文で万里は「今観鎌田子之技」、因「華岡氏法」而精之、啓「鎖宮」、收「癩疔」、其他割斷縫縛之巧、西人不能^レ加也¹⁵と手術の技を称賛している。文台が天保十四年正澄に入門するに際しては当然万里の紹介があったと考えられる。一年余を大洲で過し帰郷した文台が数か月を経ずして京都宇津木多一郎（昆台）、大坂吉益家へ一年

近い短期間ではあるが入門し本道を学んでいる。文台は正澄から外科手術を学び、その法を習得したが、症状の原因を古医方の病因観で究めようとしたことも宇津木・吉益両家に入門した動機であつたであらう。

三 治驗・病案

ここに示した治驗・病案は前述した進級に際して「御内意之覚」に付し、医術の能力を医業吟味役が審査する資料として御郡方御奉行衆中に提出された控である。全時期を通して付されているわけでなく、殆んど天保期に限られ、通常一人に三〜六条の治驗・病案が示されている。

以下渡辺宗悦の三例と飯田春達の二例をあげ、伝播した華岡流医術の実態とその成果を例示したい。

治驗Ⅰ 渡辺宗悦

鶴崎横目役深野斎助者年四十余、患淋漏雖極医療無其効矣、乞予治、診之脉細数而口燥渴身重不能自臥起、肛与茎間漏穿七穴尿道小便不通、自漏穴交出膿血、尿則発熱而汗如水流、離為尿止則惡寒而疼痛如錐刮、因忍小便、尤久昼夜兩度多則三度、故尿蓄滯膀胱似有小腹腫痞也、病人謂予曰得病二十有余年、于茲服藥又如此、大黃牡丹皮湯凡一年余、土茯苓劑、輕粉劑、水銀劑飲服盡數劑皆無寸効、於是捨宿志辭役俟斃而已、今雖不能盡愈此病若得少避苦痛幸莫大、焉予在師門嘗見療是證、服藥無効乃從其教陰茎兼陰囊之間刺針作腐、藥入其穴不日広大小便自針穴通、惟時大黃甘遂湯与之意以附子敗醬散兼用、十日余而小腹堅硬半治、又依花岡家方轉易小解毒湯主之蜂巢散兼之、五十日許而漏穴盡愈小便自尿管通、百日余而諸症全治勤役如故

治驗Ⅱ 渡辺宗悦

伊予州宇和島千女寺尼僧善法者四十五歳、患左乳三年径回諸国雖百方求治更無寸効矣、乞余診視之乳房結核大如

桃外無變色內有隱痛、余曰是則乳岳也、不徐其核不治、病人喜乞治、因作半夏瀉心加茯苓湯与之三日、至四日早且作麻沸湯空心飲之覆衾候、臆眩一時半頃而口舌乾燥腫子散大、精神恍惚忘動獨語已知見其効、余乃以左手握岳根令岳不動、以利刀割破其上手入創口探其核肉所纏筋絡而盡切断、取出之結核重二十二錢以燒酒洗去瘀血縫合創口下刃殘一針、粘野牛膏紙之後取膿為便、而塗金創油以木綿捲之作綠豆湯与之、禁熱湯進冷茶令被衾安臥、至夜半臆眩漸醒乃輒當飯、芍藥湯千金方与之二十余日而創口斂不滿五十日而全治販鄉

治驗III 渡辺宗悦

鶴崎河野乙五郎者年四十三膝頭結腫可六年、始如茶子大後如大碗、雖無苦痛逐月追年加大矣、乙五郎厭其久不請治而還、于官每歲往返于浪花五六度、因求医于彼地、医曰曾非不治凡百五十日療之必可愈乎、乙五郎厭其久不請治而還、乞余視之內堅硬而外軟弱運轉如包玉狀似乳岩、余試以針刺之、少出黑水乃知是非血瘤・石瘤・骨瘤・肉瘤蓋粉瘤・脂瘤之類也、余以鉗針十字切腫頭取出如香橙、去皮者試破之出如黑砂者所謂古人名黑砂瘤者否以燒酒洗創口縫之塗金瘡油宛如治乳岩、法紙擦粘膏藥花岡交青蛇左突号破敵用之插之一日兩度每々出黃水升余、又作通氣散堅湯与之、兼用六軍丸三十日許愈、爾後踰四十日往浪花二十余日販航于鶴崎、来余家告謝曰步行坐臥全復旧也

病案I 飯田春達

臼杵領屋山村庄屋杉崎清四郎妻年三十七、憂鬱肝ヲ傷リ積想心ヲイタマシメ、經絡痞澁シテ左ノ乳ニ一核ヲ結ビ、始ハ桃ノ如ク痒カラズ疼マズ漸大ニシテ頗ル香橙ノ大サニ肖タリ、其脉ヲ診スルニ緊數ニシテ力アリ、此胸膈痞シテ中氣舒ビズ、抑鬱ノ致ストコロナリ、核ノ輪郭ヲ捫スレバ辺傍ニ移リ亦緩ヤカニ揉メバ平正ニ帰ス、因テ麻沸散ヲ飲シメ藥氣ニ酔テ酣寢スルニ及テ核頭ヲ徐ニ授ミ定メ便チ龍鬚刀ヲ拏ゲテ既ニ正頭ヲ破リ割クコト二寸余、血迸

リ核筋ニ纏ワレテ破口ニ突イテ半バ露ハル、因テ其筋ヲ理^{ママ}メ膜ニ爪シテ癰核ヲ出シミルニ其大サ掬スルニ余リアリ、破口ヲ治ル法金創ノ方ニ拠リテ焼酒ニテ能ク湔洗シ更ニ縫合スルコト四鍼、下口ニ一鍼ホド縫コトヲノコシ膏ヲ紙燃ノ兌頭ニ塗り送り入ルコト一寸余、膿ヲ通ゼシメ雞子白ヲ軟綿ニ蘸シ貼スルコト三斤、酢木綿ヲ奄イ先鋒膏^{花岡隨賢家塾方}ヲ旧綿ニ広ク攤ゲテ風氣ヲ封護シ大補湯ニ舶上ノ人參ヲ入レ服セシメ五十日ニシテ癒ユ

病案II 飯田春達

関手永細村農夫太平男年二十一、流注ヲ患ヘ治ラ乞、其脉ヲ診スルニ浮大ニシテ力アリ、膝膕委中ノ辺漸大ニシテ正頭腐壞敗爛シテ歛ラズ、此風毒骨界ニ入り隧道ヲ瘀壅シ毒氣経絡ニ聚結シテ常ニ疼痛減ゼズ、亦膿穢モ止マズシテ毒腫甚シ、膝ヨリ踝骨ニ至リ上下通シテ脹勢殆ンド一律トナリテ行挙スルコト能ワザルコトマサニ三年ニ近シ、因テ麻沸散ヲ飲シメ藥氣ニ酔テ睡ニ就ヲ待テ龍鬚刀ヲ以テ惡肉腐瘀ヲ斷截シ、破敵膏^{花岡隨賢家塾方}ヲ貼シ一布帶ヲ以テ其四圍を緊扎シ、辛温寒濕ノ聖方桂枝加朮附子湯ヲ服セシメテ關節腠理ノ鬱毒ヲ開散シ、隧道経絡ノ氣血ヲ通暢シ膏ヲ易ユルコト一日二三回三十余日ニシテ行履故ノ如シ

治驗Iは鶴崎町の四〇余歳の男子が淋病を煩い二〇有余年種々手当をしたが藥効なく渡辺宗悦を訪ねた。宗悦は師鎌田正澄の許にあつた折立会つた同じ症状の患者の施術を手本として治療にあたり、一〇〇日で全治させたとするものである。

治驗IIは宇和島の四五歳の女性の乳癌手術であり、この記述は簡略ながら症状、術前の手当、麻沸湯の服用による全身麻醉とその効き方の状況、執刀、患部の核剔出、術後の消毒・縫合、野牛膏の塗布、綠豆湯・冷茶の飲用など要領よくその手順がまとめられている。

治驗Ⅲは鶴崎町の四三歳の男子、操舵手として船に乗り毎年五、六回大坂との間を往復航海するが膝頭に腫瘍ができ、大坂で医者に診察を求めたところ全治に三か月を要するといわれ、そのまゝ放置したところ次第に肥大した。渡辺宗悦が診察したところ外側は軟く内側は硬く玉のようで乳癌に似ている。切除して後膏藥を塗布するについて『春林軒膏方』¹⁶に効用と独自の製法を載せる青蛇・左突の混合藥と破敵の膏藥を用いている。いずれも術後の化膿防止に有効であつたようで、四〇日を経て全治した。

大坂合水堂の華岡準平に師事した飯田春達の病案二例を續いてあげた。

病案Ⅰは豊後臼杵領三七歳の女子で簪々として日々を過していた原因は左乳の次第に肥大する核にありとして麻沸散により全身麻酔下でその剔出手術をしたものである。こゝでも術後花岡隨賢家塾方の先鋒膏を塗布し、五〇日で治癒している。

病案Ⅱは二一歳の男子の膝のひかがみに出来た潰瘍が骨を侵すほどに進行していたものを手術した例であるが、その際にも麻沸散により全身麻酔して悪肉腐瘡を断截し、術後花岡隨賢家塾方の破敵膏を塗布して包帯し、一日三度とり替えて、三〇日にして歩行可能になつたというものである。

右に挙げた治驗・医案は渡辺宗悦、飯田春達が青洲の麻沸散を用いた全身麻酔法を学ぶことで可能となつた乳癌・腫瘍・潰瘍の手術と花岡隨賢家塾方による術後の処置が相俟つて成功した例である。このようにして青洲の弟子さらには孫弟子たちは多くの試行錯誤を重ねながら着実に各地に手術の成功例を積み重ねていったと考えられる。

むすびにかえて

以上『町在』に依拠して華岡流を称する医師一〇人について略歴と活動の概要を明らかにし、さらに略歴を通して華岡流外科術へ導いた人的要因について考察を加えまた實際の手術例を紹介した。これらを通して華岡流外科医

が青洲の開発した麻沸散を用いた全身麻醉法を乳癌をはじめ各種の腫瘍・潰瘍の手術に際して施し、さらに花岡隨賢家塾方による方剤と合わせて難病を癒すため精力的に取り組んでいる姿をみることが出来る。このような医者活躍は各地に展開されていたことは容易に推察でき、今後各地における掘り起しが期待される場所である。

本稿は熊本藩領における近世後期の医師の活動の一端であり、実態と同時に医師を育てる人的環境について個々の医師の伝記的研究をすゝめるなかでさらに考察を深めたい。

注

- (1) 宗田一「華岡青洲の麻醉薬開発―外来技術受容の日本化」『実学史研究』IV 昭和六十二年
- (2) 平野満「写本の識語による華岡流医学の普及の研究」『明治大学人文科学研究所紀要』第三六冊・平成六年
- (3) 松木明知「華岡青洲の麻醉法の普及―福井における橋本左内による二手術例について―」『日本医史学雑誌』四〇巻一号 一九九四年、同誌四二巻三号 一九九六年
- 山内一信・不破洋「不破家華岡流手術記録の検討」『日本医史学雑誌』四二巻一号 一九九六年
- (4) 『町在』は例は少ないが『町在之者申立扣』、『町在達帳』と書ききされている場合がある。なお本稿で特に断らない引用はすべて『町在』による。
- (5) 生年は『町在』に記載されていないが、各「御内意之覚」の冒頭に申告した時点の年齢が記されているのでそれを根拠として推定した。以下同じ。
- (6) 田口正治『人物叢書 三浦梅園』吉川弘文館 一四六頁
- (7) 江川義雄『広島県医人伝 第一・二集』四〇五頁
- (8) 片桐一男執筆「吉雄幸左衛門」日蘭学会編『洋学史典』七三五―六頁
- (9) 長門谷洋治執筆「橋本宗吉」(日蘭学会編『洋学史典』五六六頁
- (10) 『外科起癰』(大洲市立博物館所蔵)序文 日出米良倉筆
- (11) 『愛媛県医師会史』総合版 一〇八八―九頁
- (12) 呉秀三『シールボルト先生』その生涯及び功業』(東洋文庫 一〇三頁)
- (13) 『升堂記』(東京大学史料編纂所所蔵)翻刻ならびに索引(平成八年度文部省科学研究費補助金「近世における教育交流に関する基礎的研究」研究代表者関山邦宏第一次報告書) 一〇九頁
- (14) 「西嶋先生余稿」上(『帆足萬里全集』上) 六六三頁

(15) 同右 下(右同) 六七三頁

(16) 『近世漢方医学書集成30 華岡青洲(二)』 名著出版 所
收

付記

本稿は平成十一年度佛教大学特別研究助成による研究成果の一部である。